



ΑΝΑΓΝΩΣΜΑ
ΤΗΣ
ΚΑΙΝΗΣ ΔΙΑΚΟΗΣ
ΥΠΟ ΑΚΙΡΑ ΟΝΤΑ

緒 言

新約聖書の本文（UBS 版 THE GREEK NEW TESTAMENT）を朗読した録音は、私がこの言語「共通ギリシア語」ή ἀλεξανδρινή Κοινήを学び始めた 1950 年頃には、神田盾夫氏のガラテヤ書のカセットテープだけが入手可能であった。読み方はもちろん、それまでの欧米の大学と日本の教会（ギリシア・ロシア系の教会を除く）で標準とされた、いわゆる「古典式朗読法」により、「愛」は“アガペー”、「福音」は“エウアγγελιον”と読む読み方　ギリシャ人のいう「エラスムス式発音」で録音されていたので、私も最初はその欧米流儀に従って練習を重ねた。

ひと言で言えば、中国の古代詩を朗読するのに、日本では 8 世紀以来の漢学者がこの国の知識人の間に定着させた、日本の伝統文学の一ジャンルとしての「漢文」と「漢詩」に並行するものが、欧米の文化人の伝統としての「古典ギリシア語」の読み方であったと言える。中国人自身が李白や杜甫、論語や史記に使ってきた読誦法が、日本の「漢文」のそれから大きな距離を持つことは、今日ではよく知られている。

欧米の学問が伝承し、少なくとも二十世紀前半には古典教養の基礎とされた西洋の「漢文」の響きから私が解放されたのは、1960 年にアテネから送られてきた小さな録音テープの声であった。「これが...ギリシア語？」という驚きは、ギリシア人にとっての生きた言葉　それもラジオの番組用に録音された「ヨハネ伝」冒頭からのショックだった。

以後の言葉の修練、特にアテネ大学哲学部と神学部を招いて親身のご指導を頂いたシオーティス教授を通して、何人もの現代のプラトンやエウリピデスに触れて学んだ「生きたギリシア語」と「ギリシア文化」の洗礼については、文法書の「後書き」に譲るとして、以下はこの新約全巻の朗読録音が、生まれた経緯についての製作者の小さな告白である。

一つの生きた言語を身に着ける自然な方法は、**思考と発声と聴き取り**（頭と口と耳）の**三つの機能を同時に、瞬間的に動かせる**訓練である。多くの人々が誤って「死語」と理解した「ギリシア人の言葉」は、せいぜい目と頭による黙読の解釈で処理されたため、人間の言葉というよりは記号として「解読」の対象として扱われてきた。しかも初学者の場合はこれに加えて、活用や語尾変化の記憶を呼び出すのに、数秒ないし数分の思考プロセスを加算すれば、本文の解読も音声としての再現も、数学の計算以上の労力を要し、シンクロナイズの経過からは程遠かった。

この録音が未完成で進行中の段階でも、私自身はいつも自分の朗読をイヤホンで聴きながら、0.何秒遅れでも口に出して発声し、パウロなりルカなりの意図を同時に思考して理解する「頭と口の体操」を繰り返すように努力した。全巻二十数時間の録音が仕上がってMDに纏めた頃には、文字通り耳から入る音と「同時に」パウロの福音の内容を考えていた。聖書学院での講義の休憩時間だけでなく、往復の電車とバスの座席でも、隣に迷惑をかけないように、かすかに口を動かしながら聖書の言葉を思考していた私を見た乗客の中には、「いい年をしてロックか演歌でも練習しているか」と、不審に思った人もいたと思う。

この録音は「通し」で製作したものではない。神田版ガラテヤ書から示唆を受け（同時に西洋漢文への自分なりの挑戦として）最初に録音した私のガラテヤ書は1965年の作と思うが、実際に計画的な録音を開始したのは1970年頃で、1991年の完成まで20年余の経過がある。ガラテヤ書1章の声は43歳、マタイ28章の声は64歳である。約700篇の講解説教の進度に合わせ、予習用に分割録音を進めた。

音はプロの録音スタジオと違い、書斎や押入れの中でアマチュア用の機材で録ったものの繋ぎ合わせである。朗読者自身が生え抜きのアテネ人からは程遠い一人の外国人の学徒に過ぎないから、正確と明瞭を期したつもりでも、発音は時に不明瞭と訛りから自由ではない。しかし平凡な東洋人による再現とは言え、これは生の聖書音読のサンプルである。編集の途中で生じた短い欠損部分や、不明瞭な箇所の修正ができたことは、私と同じ使い方を実験しながら「音声のモニター」をして下さった横浜市の友人（「自称弟子」）村瀬彰氏の労に負うものである。

録音の使い方は、使用者の学習進度や目的により自由であって良い。「ヨハネ3：16はどう

読めば良いか」とか、「ローマ書 3 : 21 ~ 26 は聞いた人の耳にどんな響きで届いたか」というような、必要に応じての断片的な検索であっても構わない。しかし朗読者の願いを最後に書き加えるとすれば、やはり、パウロのローマ書全体とか、ルカの福音書の最後の章までとか、一つの書を選んで、通して聴きながら、また口に出して「同時音読」を試みながら、福音の内容を理解して頂くことである。

2006年11月1日 大阪府大東市

織田 昭